

Concepts of “motherhood” in Japanese Literature

—A discussion contributing to future education —

AO Asuka

Nara-Gakuen university

Faculty of Education for Human Growth

Abstract : The objective of this article is to elucidate the ideas of motherhood of each era by reviewing the ideas of motherhood throughout Japanese literature, and shed lights on how education ought to grasp and deal with the motherhood in the diversified society of today and on. In the first place, the word, ‘motherhood’ has quite wide range of definitions, and the idea that ‘motherhood is an instinct innate to mothers to bring up children’ that has been disproved by science in today’s education is still going unchallenged. Japan’s traditional idea of ideal motherhood is said to be self-sacrificing and devoted love to children. But, Collections of stories in Heian period did not value the self-sacrifices of mothers so much. Also, comedic novels in Edo period did not regard motherhood as sacred. In modern eras such as Meiji and Taisho, it was emphasized that the motherhood was the most virtuous nature of women with the idea of ‘Ryosai-Kenbo’ (good wife and wise mother). Okamoto Kanoko’s novel, Boshi Jojoh (mother-child lyric) presented an idea of motherhood that deviated significantly from the one in the same era that was represented as managing the household, and giving devoted love to their husbands and children. Koge (incense and flowers), written by Ariyoshi Sawako during the Rapid Economic Growth after the World War II presented a new idea of motherhood that was not something to bear. It is thought to be ideal that the new idea of motherhood of today is to be based on the mother-child relationships that mothers retain their own life while facing children sincerely, valuing the simple love of mothers for their children. The idea of motherhood that Okamoto Kanoko presented and the casual motherhood in Edo period may be good examples for us today.

Keywords : motherhood, Japanese literature, Collections of stories, Comedic novels in Edo period, Ryosai-Kenbo(good wife and wise mother), Okamoto Kanoko, Ariyoshi Sawako

【研究論文】

日本文学における「母性」観

―今後の教育に資する一考察―

(平成27年8月31日受付、平成27年10月20日受理)

奈良学園大学人間教育学部 阿尾あすか

キーワード…母性、日本文学、説話集、江戸の滑稽小説、良妻賢母、岡本かの子、有吉佐和子

はじめに

学校教育現場と切っても切れない関わりを持つものは、「家庭」であり、その運営者たる「親」であろう。ことに教育の対象となる児童が低年齢であればあるほど、「親」、現況を鑑みれば特に「母親」との関わりは密接なものとならざるをえないであろう。教育現場ではすでに自明のことであるが、現代の子どもの置かれた家庭環境について考える場合、高度経済成長期の一九七〇年代に確立された、夫婦に子ども二人、母は専業主婦で育児に専念といったステレオタイプの家庭像^註は通用しなくなってきた。しかしながら、テレビのコマーシャルでは相変わらずこのステレオタイプが幅を利かせ、家族四人でドライブしたり、母の手料理を食べたりする姿が連日放映され、意識の刷り込みを行っている(ように見える)。このようなステレオタイプではない、昨今の子ども^註の現状に即した望ましい家庭環境を我々はどうのようにして導き出せばよいのか。その際、子どものいる家庭で最も変化の大きかった「母親」のあり方を再考することが必要であろう。

また、少子化が叫ばれて久しいが、その原因として、女性の生き方が大きく変化して晩婚化の進んだことが指摘されることも多い。その対策として、現在、母親への育児支援の制度化が進みつつある。しかしながら、なかなか少子化に歯止めがかからないのも

現状である。それには、就学期の女子学生に、学校や社会が、魅力的な「母親」のモデルタイプを示せていないのも、一因ではなからうか。現在の日本でも、まだ家庭での家事・育児負担は母親に比重が大きく、もし母子家庭になった場合は、父子家庭や両親家庭よりも経済的に困窮することも多い。子どもに何か問題行動があれば母親のせいになれ、父親が問題とされることは少ないのが現状ではなからうか。また、保育園の騒音が問題になったり、公共の乗り物での子ども^註の泣き声に苦情を申し立てる乗客がいたことが話題になったりと、今の日本社会は幼児とその母親に寛容ではなくなってきた^註。これでは自分のライフプランを真剣に考える女性の方が、子どもをもつことにためらいを覚えかねない。無理のない母親の理想像の提案が必要であろう。

このように、ライフスタイルが大きく変化し、個人の生き方、家庭のあり方も多様になりつつある昨今、学校教育現場および日本の社会は、一人の女性の「母親」としてのあり方をどのように捉えてゆけばよいのか。過去にさかのぼって、各時代の母親像から望ましい姿を抽出するのも意味のないことではないと考える。本稿では、古代から現代に至るまでの日本文学における「母性」観を概観することを通して、この二つの問題に対するヒントを提示したい。

なお、本稿のタイトルで「母性」観としたのは、後述するように「母性」という言葉自体が抽象的で揺らぎのあるものであることを示すためである。

一、母性の定義について

はじめに、「母性」という言葉の定義と、その成り立ちについて確認しておく。

「母性」という言葉について、『日本国語大辞典(小学館)』では、「女性が、子どもを守り育てようとする母親として持つ本能的な性質や機能」とし、『広辞苑』(岩波書店)では、「母として持つ性質。また、母たるもの」としている。日常会話でも、「あの人は母性的な人だ」などと人の性格を言うのに用いる場合は、そこには相手に限らない愛情を注ぎ包容するようなニュアンスが含まれる。一方で、医学用語では、広義には女性が妊娠しうる可能性を有す状態、狭義では妊娠・分娩・産褥期を指すのであり、本能云々については触れない。

すでに、教育心理学の分野で大日向雅美氏が指摘しているように、母性という言葉の概念はこのように「不明確であり、かつ、領域や用いる人により多義的」である^{注3}。

そもそも、「母性」という言葉は、大正時代に、スウェーデンのエレン・ケイの唱えた「moderskap」(英語で「motherhood」)を平塚らいてうが翻訳したものである^{注4}。女性が育児を行うことが家庭および社会での女性の役割の重要性を世の中に知らしめ、地位の向上につながると考えたケイの主張は、現代から見れば奇異に映り、同時代でも反動的との山川菊栄の批判もあったが、当時としては女性の地位向上を意図してのものであった^{注5}。紹介者の平塚も同じことを意図して「母性」との訳をあてたと考えられるが、この言葉は当時の良妻賢母主義にからめとられ、母親としての女性の役割を至上のものとする「母性至上主義」へと変容していく^{注6}。また、ケイが母性を後天的なものであると考えたのに対し、日本婚姻史の草分けであり、法的な結婚には重きをおかない「新女性主義」の提唱者でもあった高群逸枝は、母性は女性の本能的な部分が大きいとした^{注7}。

このように見てくると、ケイや平塚のいう「母性」の原義とは、「子どもを産み育てようとする」と、母であろうとすること^{注8}を言い、それが本能的なものなのかどうかについては意見が分かれるものようである。大日向氏の指摘するように、本来の「母性」とは「育児性」に該当する意味合いの言葉であろう^{注9}。本稿でも、原義としての「母性」

はこの意味に従い、基本的には「母親としてのあり方」との意味で使用する。

二、平安説話文学における母性

以上、「母性」についての定義を行ったところで、いよいよ日本文学における母性観について検討していきたい。

古代から順に代表的な例を抽出して分析を加えるが、近代以前については、庶民階級の文学を主な対象とする。近代以前の子育ては、身分の高い母親は直接的には関わらず、乳母が中心となつて行うのが一般的であった。当然、それでも母親としての愛情があったことは、様々な文学作品より明らかであり研究でも指摘されている通りであるが^{注10}、母親が授乳し養育するのが主流の現代の育児とは比較が難しい。そのため、庶民階層を描く文学、特に説話文学を主な対象とすることとした。

平安時代初期に僧景戒によつて書かれた『日本霊異記』は、善行、悪行を積むこととその報いを主題とすることが多いが、例えば二人の対照的な母親が取り上げられている。上巻第十三話「女人好風声之行食仙草以現身飛天縁」(本文は中田祝夫注『新編日本古典文学全集10 日本霊異記』小学館・1995に拠つた)は、漆部造磨の妾が善行を積んだ結果、仙女となつて天を飛ぶにいたる話である。この妾には七人の子がいたが、貧しく着物や食事にも事欠くほどであった。だが、着物や食事も工夫をして工面し、毎日沐浴をして家の中もござっぱりとしていた。食事の時には子どもたちをきちんと座らせて、一家団欒の中、自身もにこにこしながらおしゃべりを楽しんで食事をした。こうした「風流」、高潔な心がけとふるまいによつて、妾は特に仏法は修めなかつたにも関わらず神仙となつたのだとする。妾が神仙となつた理由は、本人の人間性にあるが、母としてのあり方も当然含まれていると考えられる。まだ満足に食べられない人間も多かつた当時、子等の衣食住を事欠かないようにし、愛情を注いで育てる母親が理想とされたのだ^{注11}。西野悠紀子氏は、八、九世紀の文献で理想の母親の形容として、「賢母」は殆どなく「慈母」が多いことから、当時の日本では「子を教育し指導する母よりも、より本源的な子を愛し苦労して育てる」母が理想とされたこと、「そうした社会段階であつた」

ことを指摘している^{注11}。

そのような母親の形成には、当時の仏教的価値観も関与していると思われる。中巻第四十二話「極窮女憑敬千手観音像願福分以得大富縁」は、子を満足に養えないことを嘆く母親が観音に祈ったことで功德を得る話であるが、話の結びでは、『涅槃経』の一節、「母、子を慈^{うづし}び、因りて自ら梵天に生る」を引き、子を慈しんで育てる母が、仏に匹敵することをいう。当時の仏法では、仏が衆生を救おうとする心を母の慈愛になぞらえて説明するのが常套であった。

一方、下巻第十六話「女人濫嫁飢子乳故得現報縁」は、乳児である我が子に乳を与え、時間も惜しんで、男との情交にふけた母親が、死後、報いを受けて乳を腫らし痛みを苦しむ話である。子を飢えさせて世話をした報いで乳の痛みを苦しむ母親は僧侶の夢に現れるのであるが、どうすればよいかと尋ねる僧に対し、我が子がこのことを知ったならば許してくれるだろうと答える。僧は夢のとおり、その息子に会いに行き、夢の内容を告げる。話を聞いた子どもたちが母の供養をした結果、女は僧の夢に再び現れ、罪が償われ成仏できたことを告げる。すでに指摘があるように^{注12}、邪淫のために養育を怠る母は、中巻第二話「見鳥邪淫厭世修善縁」でも取り上げられ、ひな鳥を捨ててその父鳥ではない他の雄の鳥と通じて飛び去って行く母鳥が登場する。この両話からは、情交に耽つて子の養育を怠つた母を否定的に捉えていることが窺える。しかしながら、これもすでに指摘されているように、下巻十六話の母親は養育を怠つたことで、生前に社会的制裁を被つた形跡はない^{注13}。また、女の子どもたちが、「我、怨に思はず。何ぞ慈母の君、是の苦しびの罪を受けたまふ（自分たちは母のことを恨みには思いません。どうして、優しい母がこのような苦しみの罪を受けられるのでしょうか）」と発言し、母の供養を行っていることに注意される。孝子としての子の理想像があるのだろうか、「慈母」との言葉から、生前この女が愛情深い母親であったことで子どもたちが母を恨まなかったことが窺える。この説話からは、当時の社会が、母親に、子への養育義務と愛育を求めながらも、母親が子の養育だけに生きるべきだと考えるものではなかったことが読み取れる。

『日本霊異記』から読み取れる母性は、現代の望ましいとされる育児観とも共通して

おり^{注14}、我々から見てもさほど違和感のないものと思われる。一方で、次に示す『昔物語集』巻二十九第二十九話「女被捕乞勾棄子逃語」の母親像は、現代からすればその善悪の判断が難しいものとされるのではなからうか。

幼児を背負つた若い母親が、人気のない山中で二人の乞勾^{こっか}に襲われそうになる。窮地に陥つた母は、用を足しに行つてから男たちの要求に応じようと答える。乞勾らが母親の要求をはねのけると、母は我が身以上に愛しく思っている我が子を人質に置いてゆくと言う。乞勾らは、まさか子を捨てはしないだろうと判断し、女の要求を飲むが、女は用を足すと見せかけて子を捨てて逃げたのだ。逃げる途中で出会つた武士らに女は助けを求め、子のところに戻るが、乞勾は怒つて子どもの四肢を引き裂いて逃げたあとだった。こうした女の決断に対して、物語では、

「子ハ悲ケレドモ、乞勾ニハ否^{えち}不^か近付ジ」ト思テ、子ヲ棄テ逃タル事ゾ、此武者共讀メ感ジケル。

然レバ下衆ノ中ニモ此ク恥ヲ知ル者ノ有也ケリ。此ナム語り伝ヘタルトヤ。

（本文は小学館新編古典文学全集に拠つた）

として、武士たちが「我が子は愛しいが、乞勾には身をまかせまい」として我が身を守つた女に感心したことを述べ、女の判断を褒めている。

日本文化論の中では、日本的な母性観の特性として、自己を犠牲にして献身的に我が子へと愛情を注ぐ母親像があるという^{注15}が、この話の母親は、こうした母性観からは反する。同物語には、我が子を守るために一晩中、狼を角で串刺しにしてついにはこれを殺す母牛の話（巻二十九第二十八話「母牛突殺狼語」）もある。だが、ここでも、母牛は「放ツル物ナラバ、我レハ被^{くひ}昨^つ殺^{ころ}ナムズ（この角を放したら、自分が食い殺されるだろう）」と思つたから、角を一晩中突き立てていた、と語られている。同話で称賛されるのも、この母牛の「獣ナレドモ魂有リ賢キ（獣であつても肝がすわり、賢い）」点なのである。

当時、七歳までの幼児の存在が軽視されていたこと^{注16}や、子よりも母性優先であったこととも関係していよう^{注17}が、『昔物語集』には、何よりも命が大切という同時代

の価値観^{注18}と、生き抜くための「最も基本的な条件は、「思量リ」(状況判断力ないし洞察力)である」との編者の人生観^{注19}が通底してあることが指摘されている。二十九話の例は極端ではあるが、当時の母性観が、母親に自己犠牲を求めるものではなかったこと、まず個としての判断が評価されたことが窺える。

以上、平安説話文学から、当時の母性観を見てきた。子の養育と愛情深さを重視しながらも、時には子を犠牲にする判断でも評価する考え方からは、子を持つ女性を母性だけでは捉えてはいることが窺える。『日本霊異記』上巻第十三話の妾が神仙となったのも、まず彼女の人間性が評価されたからであった。当時の母性観が、女性をまず個として捉え、そこに付随するものとして母性を捉えるものであったことについては留意したい。

こうした個としての自分を持った母親像を肯定する感覚は、時代が中世になると薄れるようである。脇田晴子氏の指摘によれば、中世では時代が下るにつれて、子を持つ女性性は母親としてのみ評価されるようになり、母子を一体とする見方や、母親の子への愛を盲愛とする捉え方が広まるという^{注20}。女性の地位低下に伴い、母性観が異質なものになってきていることが窺われるが、宣教師などの報告に見られるように^{注21}、墮胎や嬰兒殺しが横行し、子の命が軽視され母親が優先される社会であった。

三、江戸戯作文学の母性

これまでの教育史・社会史の研究で明らかにされているように、社会の子ども観および教育観に大きな変容があったのは江戸時代である^{注22}。江戸時代は、子どもが「子宝」としてその存在の重要性が初めて社会に意識され、その教育が重視された時代であった。親子の関係も一体感を伴った、より濃厚な愛情関係によって結びついていたことが指摘されている^{注23}。

そのような社会で、母子の結びつきおよび母性はどのように捉えられていたのか。第三章では、都市の庶民生活を描いた戯作文学、『浮世風呂』を中心に検討してみたい。式亭三馬の滑稽本『浮世風呂』は、銭湯の男湯と女湯での人々の会話を通して、当時の

庶民の日常生活を描きだしたものである。「瑣末な庶民の行動を、人物の言葉からなまりまで特殊な発音表記まで用意して克明に描く」もので風俗史や国語学の資料としてよく利用される^{注24}。そこには何組かの親子が銭湯の客として登場するが、我が子をあやしながら風呂に入れる父親や母親の姿がしばしば見られる。ここでは、母子との関係をあぶり出すために、そうした父子の関係の描写についても取り上げる。

まず、男湯の場面では、六歳ばかりの男の子と三歳ぐらいの女の子を連れた父親が出てくる。父親は湯の中で手際よく女の子の体をきれいにしやり、早く湯から出たがる兄を歌であやしなから、子どもたちと湯に入っている。父親の子どもたちに対する言葉かけの以下の二例を引用すると、幼児語でほめてあやしなからのもが多く、現代の父親の幼児に対する態度にも通じるものがある。

(一) ヲ、ヲ、兄さんも強い。ソリヤ、耳の脇にばツちいの溜らぬやうに、アよいと、目つぶつてな。ソコデ鼻の下のお掃除をして、虫の食付ねへやうに、ヤレ、能子^{いっこ}になつたぞ。アレ、他所のおちさんがお誉^{ほめ}だよ。ソリヤ、お舌をべろり。ヤレ、能子^{いっこ}になつたぞ。ホイくお咳が出る。ヲ、ヲ、悪いおとつさんだの。あんまりお舌を洗つたから、腹^{はら}の方は灸があるからよませう。灸ウ誰がすえた 妹「おつかア 金「ホ、ツ、おつかアか。にくい 母^{おつかア}めだの。うなくをしてやろう。可愛坊^{かわいぼう}に灸ウすえて

(二) サア、ありがとうございます。ハイ、出ますもの、子どもく。おつかアが待てあるだらうぞ。お芋^{あんも}か、餅^{もち}か、何でも能子^{いっこ}になつた御褒美^{まち}に待^{まち}して居るだらう。
(本文は岩波書店古典文学大系『浮世風呂』に拠った。)

(二)の父親の言葉からは、母親が夫に子どもものの風呂の世話を頼んで家で待っている状況が窺え、育児の役割が母親だけのものではなく父親も時に役割を分担していたことがわかる^{注25}。銭湯で行き会った知り合いに「子が出来ちやアみじめだぜ」とぼやく父親の言葉からは、この父親が育児に関わることが度々あったことが窺えるが、これに「能^いおたのしみだア」と答える周囲の者の発言からは、父親達が子育てに関わることを、

江戸の庶民社会が幸せなことに捉えていたことがわかる。

また、(一)で母親がしついで娘に据えた灸を見て「かわい坊(江戸では女兒にも「坊」と言った)にお灸をすえて悪いお母さんだ、あとで怒ってやろうね」と言ったり、(二)で「お風呂に上手に入ってきれいなったご褒美に芋や餅を用意してお母さんが待っているよ」と言ったりする父親の言葉からは、幼い娘を可愛がり甘やかす父親像が窺える。女湯の場面でも、父親にねだって寺子屋の手習いをさぼった娘や、寺子屋に弁当を持っていきたい娘が、母親に「だってお父さんがいいって言ったから」と言い訳する場面が見え、父親は娘に甘いものという作者の見解が読み取れる。

ところで、熱い湯嫌いの子どもを風呂に入れるのに苦勞した、当時の親が子どもの好きなおやつをご褒美にしてつろうとしていた^{注26}のは、前出の父親だけでなく女湯に来た母と三歳の娘の次の会話からも窺える。

ヲ、く、坊も上手にお洗^{あひび}だぞ。コレサく、それがわるいはな。天窓^{てんく}からお湯を浴^{あび}ては今のやうに目へ染^{しみ}ます。さう、さう。能く云ふ事をお聞だぞ。坊は聞訳が能から御褒美をやりませう。餅がよかる。薄皮か、お焼芋か。小児^{こゑ}はちいあん、はちいあんが能よ。小児^{こゑ}「はちいあんとは何だの。小児^{こゑ}「はちいあんお芋が能いよ。トなき声^{おたこ}「ヲ、く。お芋く。ム、八里半か。ヲホ、、此子はマア誰が云て聞せたか。をつな事を覚えてさ、ヲホ、、

「きれいなったご褒美にお餅がいいかな、薄皮餅がいい?それとも焼き芋かな?」という母に対し、幼児がまわらぬ舌で「はちいあんお芋がいいよ」と言う。この八里半とは、「栗(九里)」に近い甘さということで焼き芋を「八里半」と言った当時の洒落である。その後、これを更にもじって「栗(九里)より(四里)うまい十三里」と言っていて、焼き芋屋が川越産(川越は江戸から十三里)の芋を売ったりした。子どもは大人たちの言っていることを聞きかじっていたのだろう。幼児の思わぬ発言に「まあ、どこで聞いたのかしら」と笑みがこぼれることは、現代でもあることであり、育児の一場面が活写されている。ここで注目したいのは、子への話しかけ方、接し方は前出の父親と大きく

変わることがないことである。どちらも七歳未満の幼児であるためか、基本的にほめてあやしなからの育児である。江戸の庶民階層では、夫婦して子どもを可愛がり、父親も協力しながら子育てをしていた様子が窺える。また、銭湯の親子の周囲には、その子をかまったり、それをきっかけに親に話しかけたりと、彼等と関わりとうする他人が登場する。江戸庶民の子育てが、父母と子の家族関係だけで閉じるのではなく、周囲もそれを温かく見守りながら行われていたことがわかる。

このように見てくると、江戸庶民の世界では、「母親が子どもの世話やしつけをするべきだ」父親たるもの、子に対しては威厳を持たなければならない」というような、明治・大正期の母性と父性の役割を厳然と分別する考え方ができない。そもそも、当時は明治・大正期と異なり、母親が子の教育に全面的にあたるという考えがなく、武士の世界では、息子の教育は父親が、娘の教育は母親が行っていた。庶民でも同性の親が教育にあたるという考え方があったようである。『浮世風呂』でも、御殿奉公へ上るため、母親にしかられて手習い、三味線、踊り、琴を習いに行き、帰宅後もそのおさらいで一日が終わってしまう少女が登場する。母親が娘の教育にやつきになるのに対し、娘は「さつぱり遊ぶ隙がないから、否^{いな}でくでならない」とこぼし、友人に次のように話すのである。

わたしのおとつさんは、いつそ可愛^{かわいが}つて気がよいからネ。おつかさんがさらへくとお云ひだと、何のそんなにやかましくいふ事はない。あれが気儘にして置ても、どうやら斯^{かぢ}やら覚^{おぼ}るから打遣^{うちやっ}て置くがい。御奉公に出る為の稽古だから、些^{ちち}と計覚^{ぼかし}れば能とお云ひだけれどネ。おつかさんはきついからね。なに稽古する位なら身に染^ぬりて覚^{おぼ}ねへちやア役に立ません。女の子は私のうけ取だから、おまへさんお構ひなさいますな。あれが大きくなつたときとかいとやらをいたします。おまへさんがそんな事をおつしやるから、あれが、わたしを馬鹿にして、いふ事をき、ません。なんののかのお云ひだよ。

父親が娘かわいさに「そこまでしなくてもいいじゃないか」というのに対し、母親が

それをはねのけ、「女の子の教育は私の担当だから、お前さんはかまわないで」と言い返している家庭内の様子が語られる。この少女の言葉からは、娘の教育は母親が行うものとの考えが庶民にもある程度浸透していたこと、娘の教育の最終の決定権が母親にある家庭もあったことが窺える。当時の、女性蔑視の考え方も反映していることと推測されるが、ともかく子どもに遊ぶ隙も与えない教育ママを作者は批判的に描く。そして、続けて、娘の発言で、母親が「山だの、海だのとある所の遠とろくの方でお産うまれだから、お三しん絞ひびきや何角なにかも習なう機会がなかったために、「せめてあれには、芸を仕込ねへちやアなりません」と、「一人で気負っているのだと冷静に分析させている。こうした我が子に自分の挫折した願望を託し、それが子にとって重荷になってしまうことは現代もままあることであり、現代では成人した娘と母の関係で注目されている注27。この母娘の関係も現代に通底するものがあり、江戸庶民の子育てと現代の子育てが質的に近いものを持っていることが窺える。母性には、子どもの自立を許さず、子どもを飲みこんでしまいかねない負の側面もあることが、現代の心理学で指摘されてもいる注28。作者の式亭三馬も、母性を絶対善として無欠のものとするわけではなく、自分の思い入れで子の意思を無視して強制する母親像を批判的に描きだしている。このように見ると、『浮世風呂』では、子どもを愛育するのは母親だけでなく父親も同じであった。母性は特別視されてはいない。

如上、見てきた江戸時代の庶民の育児は、現代とも類似した性質を持つが、母性観については異なる。母の愛は時に父親のそれよりも無分別なものとして描かれ、評価が高くない。武士階級でも貝原益軒の『和俗童子訓』にも「姑息の愛」の例として、母親の甘やかしが誠められているように、江戸時代の価値観には、母性愛を否定的に捉える側面もあり、後世のように「母性」を神聖視してはいいないことが窺われるのである。

四、近代の母性観 — 岡本かの子『母子叙情』との対比から

明治維新の後、西洋思想の影響を受けて、母親の、子の養育・教育に対する決定権が次第に定着化する。明治七年（一八七四）発表の森有礼「妻妾論」、明治八年（一八七五）発表の中村正直「善良なる母を造る説」には、良き妻で賢い母が、子どもの良い教育者た

りうるという主張が述べられ、良妻賢母思想の原型が表れている。当初の良妻賢母思想は、良き母を造るために女子教育が大切であることを説いたもので、「子育てにおける母親の精神的感化力」を「強調」することから、やがて「母親を育児の主体」へと押し上げようとする力があつた注29。大正期にさしかかるにつれて、母親を家政の主宰者とする考えが芽生え母性は美化され出す。昭和の初頭には「次世代育成要員として「母性」をひたすら内へ内と自己犠牲規範の鑑とすること」が「求められ」る注30ようになる。家政を良くして家庭を守り、国や社会に貢献するような子を育てることが母にとっての責務であり、子のために献身的で自己犠牲的な愛情を注ぐのが、当時の望ましい母親像であつた。第四章では、このような母性観を否定するような作品、『母子叙情』を取り上げ、当時の一般的な母性観を浮き彫りにしたい。また、同作品が、当事者の母親である女性によって書かれたものであることも選定の理由である。

岡本かの子の『母子叙情』は、昭和十二（一九三七）年に『文学界』三月号に発表された。作者、かの子とその夫である岡本一平、息子の岡本太郎を投影したと見られる、作中人物が登場し、ほぼ実話に基づくかのような作品である。主人公のかの女は、漫画家の夫、逸作がよき理解者となつて、仏道研究と文学にまい進する日々を送っている。二人の間に生まれた一人息子の一郎は洋画家志望で、二人が洋行した際に学業の途中で同行し、そのままパリに残り芸術活動を行っている。親の膝下から離れて自立しつつある息子に対する、母としての寂しい思いとそれを受け入れてゆこうとする愛情が作品の主題であるが、一郎を恋しく思うあまりに主人公が、後ろ姿に息子の面影を見た春日規矩男という青年に対して異性愛に似た感情を抱くところが、この作品のユニークな点である。結局、かの女は、息子への母としての愛情を完遂するために春日との絶交を決意する。その後、紆余曲折を経て一郎の自立を受け入れることができたかの女は、春日にも広い母性愛を注ぐことができると思うに至る。物語は、新たな自分の人生を生きようとする、かの女の姿を暗示して閉じられている。

かの女と一郎は、かつての逸作の放蕩という苦しい時期を共に生き抜き、現在は共に芸術に生きようとする身である。二人の母子関係は、同志に近いものがあり、「巴里」は二人にとってのキーワードでもある。逸作の放蕩期、かの女が「あーあ、今に二人で

巴里に行きましょね、シャンゼリゼーで馬車に乗りましょね(本文は昭和文学全集 5:小学館に拠る)と半ば自分に、半ば息子に言い聞かせた口癖があった。その「巴里」とは現実の巴里ではなく、「極楽」というほどの意味」であり、宗教的な意味とも異なる、苦境を脱した状態を言うのであった。実際のパリで母子がマロニエの花を眺めていた時、一郎は「お母さん、とうとう巴里に来ましたね」と言う。それは「母と子の過去の運命に対する恨みの償却の言葉であり、あの都に対するかの女とむす子との愛のひめ言」でもあった。母子にとっての「巴里」とは、母子の強い精神的紐帯と、二人が新たな関係性を生み出しつつあることを象徴する場所である。そのパリのモンパルナスのカフェに母子は出かけるが、現地の芸術仲間や女性たちと対等に渡り合い、のびのびとパリでふるまう息子を見て、かの女は彼が大人になったことを実感する。一方で、「僕、おかあさんに対する感情の負担だけでも当分一人前はたっぷりあるんだからなあ」と真実の述懐をする息子に、母親としての愛情を感じる。そこには、互いに一個の独立した人間として本音で向き合って、その存在を認め合う母子の関係が窺われる。

また、逸作と一郎、そしてかの女自身も、かの女の母としての過大なまでの愛情を冷静に認識し、それを受け入れていることが文章の各所で示される。「嫌な夫や馬鹿な子供なんかの生活構成のなかで出来上がっているあなただったら」こんなに好きにならなかったかもしれない、と言う春日に對しながら、自分と一郎との「母子情」について、かの女は次のように考える。

私の原始的な親子本能以上に、私のむす子に対する愛情が、私の詩人的ロマン性の舞台上まで登場し、私の理論性の範囲にまで組織され込んでいる。ぜいたくな母子情だ。この私の母子情が、果たして好いものか悪いものか：だが、すべて本質というものは本質そのもので好いのだ。他と違っていいからと云って好いも悪いもありはしない。

かの女は、自分の母性愛がナルシズムに結びついて自己の源泉になっていることを自覚し、それを「本質」と捉え、肯定的に受け入れている。大学への進学を躊躇してい

る息子を危ぶみ、「何とかしてあの子を、勤め先のはっきりした会社員が何かにして、素性のいい嫁を貰って身を固めさせてやり度いと思うのでございます。それには大学だけは是非出て貰わねばなりません」と言う、春日の母親は、かの女とは対照的な存在であり、それだけにかの女は失望と嫌悪感を覚える。そこには、「夫のために」「子供のために」という大義名分のために、その権力を発揮するような「役割母性」^{注31}への反発がある。

このような母に会ったことをきっかけに、春日に對してかの女は、前よりもいっそう信愛の情を抱く。春日への愛情に異性愛が混じっていることに気付いたかの女は、「本能的にもより本能的なる母の本能」から、子への愛を汚したくないと思い、春日と絶交する。かの女の描く「母性」は、ただただ子への深い愛情として捉えられるものであるが、それは他者に向かえば異性愛に転じうるものでもあった。相手を深く愛するという点においては、母性愛も異性愛も同じだからである。従来の研究で、すでに、岡本かの子の文学の特徴として、「恋人と母性の両面をそなえ、他の存在をも引き受けるような」(「純粋母性」のあること^{注32})が指摘されている。最終的に春日へも母性愛を注げると思う、かの女の「母性」は、作家自身が大乘仏教を研究していたこともあって、「世間中的子供、さらには生きていくものすべてに渡ってゆく」^{注33}、救済的・信仰的愛へと昇華されていく。あらゆる愛情を包含する、「慈愛」ともいえるべき母性観が指摘できよう。

こうした岡本かの子の母性観は、同時代の「良妻賢母」に基づく母性観からは大きく外れるものであり、どちらかといえば『日本靈異記』に見られたような、母の愛を仏の慈愛になぞらえる母性観に近い。しかしながら、『母子叙情』での、かの女の母性は、我が子に個としての存在を認める点において近代的な性格を持つ。パリの新聞の学芸欄で一郎が「世界先鋭画壇の有望画家の十指の一人」に選ばれているのを見て、かの女は「芸術という難航の世界」で活躍し、「舵を正しく執りつつある」息子を、同じ芸術に生きる者として嬉しく誇らしく思う。また、パリからの一郎の手紙は、芸術家気質でナルシストの母に對して、「しっかりとした性根と、抵抗力のある心の皮膚を鍛えしむるよう心懸けている」ことが読み取れ、それがまた彼自身にも共通する弱点であることを本人が自覚している故の文面であった。それを、「お前はよくも、そこに気がついた」と、息

子がたくましく成長を遂げた証拠として、かの女は喜ぶのである。その一方で、やはり母として子の自立に戸惑いも感じたかの女であったが、最終的には「やっぱり自分の求める通りむす子に踏み込めばいい、あの子はあの子であることに絶対に変りはない」と自分の母性のあり方にも自信を持つに至る。

感情の揺れをとめないながら、同志である息子の自立を受け入れてゆく、かの女の「母性」は、一郎に独立した個人として真正面から向き合うものである。また自己に陶醉する自らの母性愛を冷静に捉えてもおり、客観的に自己を認識できる自覚的な「母性」でもある。こうしたかの女の母性の在り方は、当時の一般的な社会通念の母性とも、大正期の女性解放運動での母性とも異なるものであった。大正期の女性解放運動での延長線上に行われた、母性保護論争でも、母性の性格内容については問われることがなかった。岡本かの子の母性の特異性と先鋭的 성격が浮かび上がる。

五、戦後の母性観 ―有吉佐和子『香華』

終戦後、アメリカの民主主義の影響を受けて、男女平等が法的に認められ日本の家族観も大きく変化することとなるが、その後の高度経済成長の時代下では、家庭での母親の役割は家事・教育であるとの考えが、より明確化される結果となった。戦前の庶民家庭では殆ど存在し得なかった専業主婦という生活スタイルが、一億総中流化のもと、一般的なものとなる。これに対し、父親は外で企業戦士として働いて家庭の収入および直接的な社会貢献を担い、家庭での父親不在が進む。既成の食事や衣服を子どもにも与えるのは母親として母性の発達不全とされ、母親は家庭に入り教育に専念すべきだとの社会通念が固定するのもこの頃である^{注34}。一方で、すでに戦前の山の手の中産階級でも表れていたように、父親を排除した母子の密着した関係が表面化し、問題視されつつあった^{注35}。第五章では、母性に新たな観点を提示した作品、『香華』を取り上げる。この小説が、女性の立場から母性を扱ったものであり、母と娘の關係に注目した先蹤的な作品であることが選定の理由である。

高度経済成長期にベストセラー作家として活躍した有吉佐和子は、しばしば母性を

テーマとする小説を発表した。紀州の素封家を舞台に、明治・大正・昭和の時代を生きた祖母・母・孫三代の女系の系譜を描く『紀ノ川』(昭和三十四年)、母と娘の愛憎を描く『香華』(昭和三十七年)、芸に魅せられた男を一途に思う娘を母が支える『一の糸』(昭和四十年)、母と娘が一人の男をめぐる争う『母子変容』(昭和四十九年) などである。母娘の葛藤は、『紀ノ川』でも取り上げられているが、『紀ノ川』が世代間の価値観の対立としてそれを描くのに対し、『香華』では個性の対立として描くのが特徴である。

『香華』は、昭和三十六年(一九六一)から翌年まで『婦人公論』に掲載された。主人公朋子は、紀州の地主の家に生まれ、それぞれ未亡人になった祖母と母と暮らしていた。美貌の持ち主である、母の郁代は子育ては祖母にまかせきりで、最終的には朋子を置いて他家へと望まれて嫁ぐ。祖母は母のことを「親不幸」とのしりながら亡くなり、朋子は母に引き取られるが、生活苦から母に芸者に売られてしまう。だが、その母も夫に売られて女郎となった。やがて、朋子は東京で芸者として一本立ちするが、その際、母も引き取り、のちに旅館の経営者となる。戦後には一流料亭の女将として成功をおさめるに至る朋子の一代記であるが、そこに母郁代との愛憎が絡み合う。

郁代は、朋子以外にも、次々と子どもを産みながら、母性の欠落した、徹頭徹尾、性愛に生きる女性として描かれている。一方の朋子は子どもを切望するがめぐまれません、甥を養子とするにいたるが、子どものころから母性の強い女性として描かれる。全くタイプの異なる対照的な、この母子の關係が、この小説の軸である。

母性の強い朋子は、郁代にも母性を求めるが、郁代は常にそれを裏切る存在である。朋子が、真剣に結婚を考えた江崎との恋が破局となり、結婚を一度もしないのに対して、母の郁代は三度も結婚をする。朋子は逆上し、「おかあさんが、私の分まで結婚をするものだから、私は、結婚が、一度だって出来なかった」と郁代にこれまでの思いをぶちまける。ところが、母へ甘えたい気持ちもあって心情を吐露した朋子に対し、郁代は、「それ嫉妬と違うかいし」と冷や水を浴びせるような言葉しか言い返さない。戦争中、郁代は、三度目の夫と暮らす大阪の家を飛び出して東京の朋子の家へと転がりこむが、ある日、空襲で母娘は防空壕へと駆け込む。不安がる母の手を握りながら、朋子は母とこのまま死ぬことを夢見る。

親と娘と、相抱きあつて焼け死ぬなどというのは、一度も親らしいことのなかった母親と、親への苛立ちと憎しみと、やりきれなさの囚とらでしかなかった娘にとっては、まさしく幸運というふうなものではないだろうか。朋子は、次第に恍惚境に引き入れられ、自分の考えに酔い始めていた。

(本文は新潮文庫に拠る)

しかし、母との一体感に酔いしれる朋子に対し、郁代は、夫のいる「大阪に居てたら、よかつた」と口にする。朋子は「全身に水を浴びたように」思い、自分の思いが少しも母に通じないことに逆上する。

朋子は、母に、「母親らしいこと」「母性を求めるが、郁代は、常に「女性性」としてしか対峙しようとしめない。母と娘の気持ちはいつもずれ、朋子は裏切られたように思うのに、母娘の血のつながりを母に求めてやまないのである。このことについての先行研究での、

血縁への幻想を持つ朋子は、母親との一体感を何度も夢見ては裏切られる。ここには、産むことと母性を持つことは別だと言う考えがはっきりと出ている。

との指摘は非常に重要であろう^{注36}。有吉は昭和三十四年(一九五九)に『婦人公論』に発表した『新女大学』で、「子供を産んだことのない人でも、女でさえあれば必ず母性を備えているもの」と述べ、母性について次のように言及している。

私は、母性を、女の持つ唯一にして最高の徳性だと思っています。女性も男性も、それぞれ不徳なものを多分に持っていますが、母性とは、徳そのものなのです。それは事象を認識するよりは抱擁し、判定するよりは許容します。これに抗い、これに叛き、これを傷つけるものではありません。

(本文は『新女大学』(中央公論社・1960)に拠った)

自身がカトリックの信者であった有吉は、この後、聖母マリアの愛になぞらえて母性について説明するが、ここからは、母性を「抱擁し、許す性」として、その性質を肯定的に捉えていることが窺われる。朋子が郁代を憎みながらもいつも許してしまう態度は、まさにこの許す母性に相当する。朋子と郁代の関係については、逆転した母子関係が指摘されてもいる^{注37}。

有吉は『新女大学』において、このあとも女性性は誰もが持っている母性を強められるように自分の中の母性を育てなければならぬと述べる。母性は子を産んだからと言って強くなるわけではない、自分で育てるものだと考える有吉の母性観は、子を産み母親となることを、女性の至上の任務と捉えて神聖視する戦前の社会の価値観を批判するものであり、新しさを評価できる。しかしながら、母性を女性の本能と捉える点については、同時代の母性信仰と重なる点があり限界が見られる。事実、母性という女徳を多分に備えていると作者が設定する朋子は、芸者の我が身を恥じて家庭の主婦に憧れ、「子供を産む」ことを「輝かしいこと」と考える。朋子も「家族神話を絶対化している点で、男性社会の秩序の信奉者」と言えるのであり、また、「つねに自立しようとし、上昇志向を持つ勤勉」さを良しとしてそれを体現するさまは、高度経済成長期の日本社会の価値観に同化するものである^{注38}。

一方、社会の規範からはずれない朋子に対し、母性をもたない郁代は社会の規範から自由で、性愛にのみ生きている。四十歳を過ぎてレビュウのオリ工津坂が、朋子の実父に似ているからといって夢中になる郁代に対し、朋子は、「浅ましい」との感想しか抱けず不快感しかない。自分が芸者であること、郁代が女郎であったことを恥じる朋子に対し、郁代は、「肩身が狭いとは思ってへんのえ」と言い、「女やもの、男さんを選び好みでできる自由があったあの頃は、何が辛うても幸せやった」と述懐する。有吉自身が、芸術座『香華』の舞台パンフレットで、郁代について、モデルになるような人物は身近になかったにも拘らず、作品のキャラクターとして自在に描くことができたことを述べている^{注39}。

こうした『香華』の人物設定について、吉田精一が有吉との対談で、「母性的なもの」と

娼婦的なものというか、女の二面をつかまえて、両者の「型」を朋子と郁代がそれぞれ担っていることを指摘している^{注40}。これに対し、有吉は「母性」性と「娼婦」性とどちらも女性を持つているが、技術的に二人に担わせたと返答している。つまり、抱擁し許容する「母性」と、自由に性愛に生きようとする「女性性」は、一個の女性に同居するものであるが、それを便宜上、分けて二人の人物にキャラクター化したというのである。郁代と朋子のキャラクターは、二人で一体であり、そのゆえに母子である必要があった。

母性と女性性とを一個の女性の中に同居するものと見る点において、有吉の主張は新しいが、やはり既成の母性観にしばられた点も見られる。作中で、これまで関係を持った男たちが次々と亡くなり、ついに母も亡くなったことに思いをはせた朋子は「人を見送ることはない、もう飽きた」と心の中でつぶやき、「私は、この子の成長を見るために生きよう」と甥の常治の養母になることを決意する。幼い常治は「これまでに同衾したどの男たち」とも違って、「どこにも裏切られる懼れがなく、」愛しいものだった。朋子の常治への母性愛が、これまでの男たちに向けられた異性愛の代替であることが読み取れる。母性と女性性は一個の女性に同居するものであっても、対立する要素であり相並ぶものではないとする作者の意識が窺われ、ここでも同時代の母性観からは完全に自由ではいられなかった限界が見られるのである。

また、『紀ノ川』で伝統を受け継ぐことをテーマとした有吉は、『香華』にいたり、「もはや蒼古な家の美に酔うよりも、それを自ら破壊する側に立とうとしている^{注41}」と述べており、作中でも郁代の遺骨を受け入れない和歌山の人々に対して、「この保守頑迷の国に生れた自分が口惜しいばかりだった」^{注42}「あんな家は、一度火を点けて燃やしてしまえばいいのだ」と怒る、朋子の気持ちを書きだしている。『香華』でこうした視点が新たな作風へとつながっていったことには指摘がある^{注43}が、有吉が郁代の「女性性」を全否定しているわけでもないところにも、新しい女性の生き様が提示されており注目される。高度経済成長期の急成長から安定した一九七〇年代、成長期を支えた母親の生き方について、フェミニズムの側から新たな生き方の提示がなされた^{注44}。郁代のあり方はこうした社会の変革を象徴しているようでもあり、興味深い。

まとめ

以上、駆け足ではあったが、平安時代から戦後の昭和までの日本文学を通して、そこに表れた母性観について概観した。時代によって母性観は変容しており、いまだ現代社会でも根強い、自己犠牲を伴った母性への信仰が、古来から根付いているものではないことが証明できた。説話集の母性観は、子への愛情を重視しながらも自分の命を一番に考える、現代の我々にとっては非情に感じられもする側面をもつものであった。江戸時代の戯作文学からは、取り立てて父性と母性を対立的なものとして分別しない、気負わない母性観が見られた。父子・母子に向けられた、周囲の温かいまなざしについても、興味深いところである。明治・大正期から戦前の昭和初期になると、現在の母性信仰の完成が見られる。そのような固定的な社会の母性観にあつて、異性愛を母性と対立したものと捉えない、岡本かの子の母性観は、独自で自由である。また、お互いを個として認め合う母子関係も特異である。かの子自身が、母親だけの役割に終わらず、自分の世界を持つていたことが大きいであろう。戦後、高度経済成長期にいたり、母性信仰は「母の愛」の名のもとに強固なものとなるが、一方で閉じられた病理的な母子関係を生んだ。有吉佐和子の母性観は女性の生き方をも含めたもので注目される。有吉の母性観は既存の価値観に縛られた面もあるが、「母親」を絶対視しない点で重要である。女性の生き方が一つではないことを提示した点についても、先見性を感じられる。

このようにしてみると、女性および男性の生き方、家族のあり方も多様化した現代、どの時代の母性観が参考になるであろうか。子どもの発達の面から考えてみよう。子どもは、親などの養育者からの愛情を受けて愛情、信頼というものを覚え、周囲の人々の愛情から社会への信頼や関わり方を学ぶ。養育者の愛を基盤にしなが、大勢の人の愛情に見守られて育つことが、健やかな育ちへとつながっていくのだろう。説話集の、子の養育そのもの（衣食住の世話という基本的なこと）と、おだやかな愛情を重視するところは、母性観の基盤にすべきものとして参考になろう。父も母も気負うことなく、子の成長に喜びを感じながら愛情深く養育に関わっていく江戸庶民のあり方も参考になる

ところである。また、周囲との温かい関係の中で、この親子関係が築かれている点は特に注目したい。血縁、地縁をひたすら厭い避ける方向で来た現代の我々は、家庭内で閉じられた育児の困難に直面している。過去の庶民生活では普通に行われていた、周囲の人々が親子関係を温かく見守り応援することは、もう一度見直されてもよいのではなからうか。

一方で、江戸時代までの母性観では、母親の「個」に対する対応ができない。そうした時、岡本かの子の、それぞれが自分の「個」を持ち相手のそれを尊重する母子関係は参考になる。有吉佐和子の女性観に示されたように、己の「個」を大切にし自由に生きようとする女性の願望は一個の人間として当然の権利ではある。しかしながら、養育者との関係において人間関係の基盤を作る子の健全な発達のためには、子を自分の生活の中心に据えて考えることがどうしても大事になってくる。かの子の自分の世界を持ちながらも、子と正面から向き合いそれを子に伝える姿勢は、大いにヒントになる。

そして、親の手によって生命の危険にもさらされる子どもがいるという社会の現実と向き合うには、母性は子を産んだからと言って強まるものではない、育てるものだという有吉佐和子の母性観が重要なヒントとなる。このことは現代の研究でも証明されている^{注44}とおりであり、母性への過信を捨てるといふこと、母は子をかわいがるものだという社会通念を変えることが求められている。稿者自身、一児の母として自戒するところではあるが、母親であるということ自体は、その女性に起こった現象を表すに過ぎないのであり、彼女が養育者としての適性をそなえているかについては、また別の観点から検討されなければならないのである。我々には、「母性」と冷静に向き合うことが必要である。

そして、一番忘れてはいけないのは、子育ての責務はすべて母親にあるのではないということであろう。子どもは母親一人が産んだのではない。父親の存在もあってはじめて、この世に生まれることができたのであり、親以外の人間とも関わりながら育つ。今後、我々は、母性のあり方を問いつつも、たとえ離別後であっても子が養育段階にある間は、父親のあり方を問う必要があるし、また、肉親のあり方、社会のあり方をも問うていかねばならないであろう。

《主要引用・参考文献》

- 1 蔵澄裕子「母性」と家族像―近代女子道徳教育と日本的家族像形成への道―(『東
京大学大学院教育学研究科 教育学研究室 研究室紀要』35号・2009年)
- 2 大日向雅美「母性の研究 その形成と変容の過程…伝統的母性観への反証」(川島書
店・1988年)
- 3 沢山美果子「近代日本における「母性」の強調とその意味」、人間文化研究会編『女
性と文化』所収(白馬出版・1979年)
- 4 加藤裕子「母性」の誕生と変容(『中央大学大学院年報』28号・1999年)
- 5 森山茂樹・中江和恵「日本子ども史」(平凡社・2002年)
- 6 西野悠紀子「律令制下の母子関係―八、九世紀の古代社会にみる」、脇田晴子編『母性
を問う 歴史の変遷(上)』所収(人文書院・1985年)
- 7 山村賢明「日本人と母」(東洋館出版社・1971年)
- 8 柴田純「日本幼児史 子どもへのまなざし」(吉川弘文館・2013)
- 9 服藤早苗「平安朝の母と子 貴族と庶民の家族生活史」(中公新書・1991年)
- 10 高橋寛「作られた世間話 ―『今昔物語集』巻二十九第三十八話「母牛突二殺狼一語」
考―付、『今昔』の母と子」(『専修国文』第七五号・2004年9月)
- 11 池上海一「『今昔物語集』の精神世界―「思量り賢キ」こと」(『日本学』1号・
1983年5月)
- 12 横田隆志「悪行」篇の世界―『今昔物語集』巻二十九のために―(『国文論叢』
1997年3月)
- 13 脇田晴子「母性尊重思想と罪業観―中世の文芸を中心に」、脇田晴子編『母性を問う
歴史の変遷(上)』所収(人文書院・1985年)
- 14 ルイスフロイス著・岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』(ワイド版岩波文庫・
2012年)
- 15 太田素子「子宝と子返し 近世農村の家族生活と子育て」(藤原書店・2007年)
- 16 神保五彌「新潮古典文学アルバム24 江戸戯作」(新潮社・1991年)
- 17 太田素子「江戸の親子 父親が子どもを育てた時代」(中公新書・1994年)

- 18 オールコック著・山口光朝訳『大君の都 幕末日本滞在記(上)』(岩波文庫・1962年)
- 19 木本尚美『江戸時代の子ども—『浮世風呂』からみた日常生活—』(『日本教育心理学 会総会発表論文集』(29)・1987年8月25日発表。)
- 20 河合隼雄『母性社会日本の病理』(中央公論社・1976年)
- 21 与那覇恵子『岡本かの子—(純粹母性)と(役割母性)—』(『国文学 解釈と鑑賞』45、1980年4月)
- 22 江藤淳『成熟と喪失—母の崩壊—』(初版河出書房新社・1967年、のちに講談社 文芸文庫・1993年)
- 23 宮内淳子『父親のいない幸福 —『香華』芝桜』(井上謙 半田美永 宮内淳子編『有吉佐和子の世界』翰林書房・2004年)
- 24 半田美永『有吉佐和子『香華』を読む —終章(第二十五章)における『片男波』の解釈をめぐって—』(『皇学館論叢』24巻3号、1991年6月)
- 25 『有吉佐和子・吉田精一対談』時代に生きる女性像』(『国文学』15巻9号、1970年7月)
- 26 有吉佐和子『私の文学 ああ十年!』『われらの文学』15 阿川弘之・有吉佐和子『講談社・1966年』
- 27 斎藤美奈子『モダンガール論 女の子には出世の道が二つある』(マガジンハウス・2000年。のちに文春文庫にて文庫化)
- 《注》
- 1 蔵澄2009
- 2 たとえば、ABERA(2014年2月3日号)が「保育所に『うるさい』苦情増加進む『子ども排除』」という特集を組んでいる。
- 3 大日向1988、p.9
- 4 沢山1979、加藤1999
- 5 蔵澄2009。なお、この「母性」については、与謝野晶子も、女性は母性のみによつて生きるのではないと批判しており、平塚、与謝野、山川らの母性保護についての論争へと発展している。
- 6 蔵澄2009
- 7 蔵澄2009
- 8 大日向1988、p.61
- 9 たとえば、「母性愛の文学」とされる古典文学には、『蜻蛉日記』『成尋阿闍梨母集』『十六夜日記』『竹むきが記』などがある。
- 10 森山・中江2002、p.55も、「この話の中には、子どもの母として、あるいは主婦として理想の女性の姿が描かれているのであろう」とする。
- 11 西野1985、p.94。
- 12 中田祝夫注『新編日本古典文学全集10 日本霊異記』(小学館・1995)、第十六話頭注。
- 13 西野1995、p.103
- 14 現代の母性研究を代表する大日向1988、p.197では、実証によって、子どもに自立的関係を育成させるには、母親の対人関係の広さと同時に、母親が自身の生活の中心的位置に子どもを据えることの重要性が指摘されている。
- 15 大日向1988、pp.44-48、山村1971、p.5
- 16 柴田2013、pp.33-53
- 17 服藤1991、p.9
- 18 高橋2004、p.16
- 19 池上1983、横田1997、p.27
- 20 脇田1985、pp.181-183
- 21 たとえば、墮胎はさきわめて普通のことであり、子どもを育てていけない女性が嬰兒殺しを行っていたことなどが記されている(フロイス2012、pp.50-51)。また、主に武家階級の子を指すと思われるが、日本の子どもが「寵愛も快樂もなく育てられている」ことも報告がある(フロイス2012、p.66)。

- 22 森山・中江2002や太田2007、柴田2012など。
- 23 太田2007では、生活苦からの間引きなどの育児殺しもある一方で、農村にいたるまで社会で広く子どもが大事に愛情深く育てられたことを指摘している。
- 24 神保1991、p. 42
- 25 太田1994。こうした育児の役割を母親と分担することは、下級武士などにも見え、幕末の外国人が残した記録、たとえばオールコック(1962、p. 201)には、夕方、子守りをする父親たちが路上のあちこちに見られたことが記されている。
- 26 木本1987では、「幼児連れは、昼前の湯屋場面であることから、児は入浴後に昼食を取る習慣があったのだろう」とするが、ここでは素直に文面通り、ご褒美のおやつと解釈したい。
- 27 たとえば、信田さよ子『母が重くてたまらない 墓守娘の嘆き』(春秋社・2008年)のベストセラー化。この現象はマスコミにも取り上げられた。
- 28 河合1976、p. 8
- 29 太田1994、p. 235
- 30 蔵澄2009、p. 102
- 31 与那覇1980
- 32 与那覇1980
- 33 与那覇1980
- 34 大日向1988、p. 57
- 35 江藤1967(1993年版、p. 37)では、特に日本の母と息子の関係の濃密さと、母の息子に及ぼす影響力の強さを指摘している。
- 36 宮内2004、p. 209
- 37 半田1991
- 38 宮内2004、p. 210
- 39 宮内2004
- 40 有吉・吉田1970
- 41 有吉1966、p. 470
- 42 半田1991
- 43 斎藤2000、p. 263-286
- 44 大日向1988
- 〔付記〕本稿は、科学研究費補助金(若手研究(B)「鎌倉時代後期の宮廷における王朝文化継承と新文化創出の再検討―伏見院の宮廷を中心に」(課題番号15K16691)による研究成果の一部である。